



あさなぎ

由日

「赤」

「太陽は赤くない」

そう、言ったことがある。

「…いいの」

少しの間唇を真一文字に結んだ後、彼女は少し怒ったようにぐりぐりと赤色を円の中に塗りたくった。

見てみなよ、とじりじり焼きつくような熱を放つ太陽を顎でしゃくると、目がつぶれる、と答えて赤のクレヨンケースに戻した。

これ見よがしに黄色の太陽を隣で描いてやると、彼女は目を伏せて赤色がこびりついた指をごしごしとこすり合わせた。

「…………嫌い」

正しい事を言っただけなのにどうしてそんな風に言われなくてはいけないのか。

胸の奥から喉までむかむかした物が込み上げて来て、持っていたクレヨンを放り出すと彼女が丁寧にした赤色を取り上げ、思わず、折った。

彼女の目が驚きで真ん丸になったのだけ、覚えてる。

「パパー」

軽い足音がフローリングの廊下を駆けて来るのが聞こえる。

足元までたどり着いた小さな頭をぐりぐりと撫でてやると、頬を微かに紅潮させた娘が、どうだ、とばかりに一枚の絵を掲げてみせた。

緑の草、ピンクのウサギ、青い魚と黄色い鳥、茶色の犬、青い空、白い雲。

赤い太陽。

あの日の彼女の怒った顔を思い出して、どうしてあんな事を言われたか少しだけ納得いった気がして。

娘の太陽のような笑顔を抱きしめた。

「青」

「青いバラを知っていますか」

懸濁液（けんたくえき）を遠心分離機にかけながら、教授がぼつりと言った。

「え？あ・・・はい」

いきなり実験と違う話をされたものだから、私は取っていたメモに思わず「バラ」などを書いてしまい、返事をしながらその二文字を黒く塗りつぶした。ぶーん、と言う機器の動く音の中でため息のような声が返ってくる。

「そうですよね」

「ええ」

正直、なぜ教授がいきなりそんな話をしだしたのか訳が分からず、私は曖昧に調子を合わせた。青いバラと言え、品種改良のみでそれを作り出すのは不可能とされ、遺伝子組み換えが試みられていたが、数年前には発売にまで至ったはずだ。

遺伝子組み換えと縁の無い研究をしている訳でも無いし、羊のドリーと同じくらい有名なんじゃなかろうかと思いながらまたメモにペンを走らせることに没頭する。

「花屋で見かけましてね、この前」

「・・・青いバラですか？」

どうにもこの話を続けたいようだと思いつき、手を止める。いつの間にか遠心分離機も止まっていたが、中身は取り出される気配も無い。

「花屋なんて一年に一度しか行かないんですが」

教授の言葉はぼつりぼつりと続いた。一年に一度と言うのはあれだ、奥さんの誕生日だ。研究室の飲み会か何かで聞いた覚えがある。二人とも特別花が好きと言う訳でも無いが、何年もプレゼント選びに苦心した末そこにたどり着いたらしい。

「なんだか違和感がありましてね。実物を見たのが初めてだったからかもしれませんが」

「真っ青、では無いですよ」

「いえ、私が見たのは真っ青でした。白いバラに染料を吸わせて色を付けているそうです」

「なるほど」

どうやら私が考えていた物とはまた違うらしかった。教授はネットで検索して写真を見せてくれた。確かにこれは真っ青、だ。

「切り過ぎた前髪、みたいな感じですね」写真を眺めながら呟いた。

「前髪？」

「見慣れないから違和感があるけど見慣れたら平気、と言うか。普通、と言うか」

「奇跡、神の祝福」

教授はいつもの人の良さそうな笑顔を浮かべた。

「青いバラの花言葉だそうです」

カチカチとマウスのクリック音がした。

「似合っていますよ」

私は曖昧な笑いを浮かべて前髪を押さえた。

「黄」

「働くのよ」

そう言われた時から絶え間なく私の時間は廻り続けている。

働かない、と言う選択肢は私には無かった。世の中には、勿論そう言う（働く以外の）役割を持つものもいることを知っているが、それと同時に私がそうでないということも良く知っている。つまり、私はただただ働くのだ。命を繋ぐ為に。

「こっちじゃなかった・・・」

言われた通りに言われた場所へ来たはずが、私はひとりぼっちだった。

自動車の排ガスにまみれながら小さく小刻みに呼吸した。

別にいじめられてる訳じゃない。私が間違えるのだ。何度注意されても何度反省しても、どうしてもまた間違える。

目的地にたどり着けないのだから、そもそも仕事をする以前の問題だ。

来た道に戻る。泣きそうだ。

同僚の「またか」と言わんばかりの視線が突き刺さる。

やっとのことで目的地に着いたときには、目当てのものはもうあまり残ってはいなくて。

私は残りかすみたいなのを必死にかき集めると急いで帰路に着いた。

帰れば帰ったで

「並んで」

の一言。列の最後尾を示されて私はしょんぼりと指示に従う。

いわゆるエリート達は行動が早い。だからより質の高いものを持って帰ってくる。そして、そういうエリート達は列に並んだりしない。

優先的に、その確保したものを担当に渡すと、にこにこした笑顔に送られてまた颯爽と飛び出していく。

私なんて日の半分はこうして順番を待っているのじゃなからうか。

「こんな日もあるよ」

と、同僚は言う。

馬鹿なこと言わないでほしい。「こんな日しかない」んだから。

自分の存在意義、なんてものを考えてみたりするが、私のちっぽけな脳みそはすぐに沸点に達する。

無理無理。そんなこと考えてたらまたミス連発しかねない。

私は何も知らなかった。

そんな風に毎日が、失敗しながらも続いていくものなのだと疑いもしなかった。

「・・・え？」

産まれて初めての感覚だった。

その場にいた全員が直感的に異変を察知した。私の直感もみんなに遅れを取らなかった。少しだけそれが嬉しかったのだが、すぐにそんな事で喜んでいる場合ではないと気づいた。

「侵入者！」

張り詰めた、悲鳴のような音が響いた。

「侵入者！」 「侵入者！」 「侵入者！」

鋭い叫びは伝播して行く。

入り口近くにいた私は迷わず飛び出した。

大きな体のそいつはすぐに視界に飛び込んできた。ぎょろりとした目で辺りを落ち着きなく見回しながらにたりとした奇妙な笑いを浮かべている。

命に関わる危機が目の前にある。頭が真っ白になった。

真っ白な頭のまま、私はそいつに飛びついた。

巨体を揺らして私を振り落とそうとするが、例え手足がもげても離すものか。

次々にみんなが飛びかかってくる。そこには一寸の迷いも無い。

泣きそうになりながらしがみついて必死に体を震わせる。自分の中に染みついた本能を痛いほどに感じながら。私は決してそいつから手足を離さなかった。

二重にも三重にもみんなが重なって、外から見たらきつとうごめく団子のように見えたことだろう。

熱かった。

感じた事の無い熱の中で、その熱に堪えきれずに涙が出た。

泣きながら、私はその熱の中で気を失った。

「 」

誰かの声がしてようやく意識を取り戻した時。視界に真っ先に飛び込んできたのは、黄色と黒に縁取られたそいつの亡骸だった。

私は味わった事の無い喜びに踊りだしそうになった。

なんて素晴らしいんだろう！ 生きている、この共同体の中で、この集団の一部として！

私は羽を震わせ、意気揚々と巣に引き返した。

あさなぎ

<http://p.booklog.jp/book/35178>

著者：由日

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yuuhiazuma/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/35178>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/35178>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.